



## インターンシップ

大学・短大・高等専門学校生らが職業を選ぶ参考にするため、企業や官公庁などで実際の仕事を体験する取り組み。大学が受け入れ企業を紹介し、インターンシップへの参加が授業の単位として認められるケースも多い。大学での実施率は1996年度は17.7%だったが、国の後押しもあり、2007年度は67.7%に達した。

学生が企業などで一時的に働く就業体験「インターンシップ」は、一環として、経営者と行動をとるに、その立ち居振る舞いをじかに学ぶ「社長のかばん持ち」を探り入れる大学が増えつつある。起業家を目指す学生らに好評で、若者への認知度アップを図りたい企業側にとってもメリットがあるという。

(阪本輝昭)

## 社長密着 学生かばん持ち

商談同席「様々な力必要と感じた」

## インターン 大学支援



「Nice to meet you! (はじめまして)。甲南大マネジメント創造学部(兵庫県西宮市)2年の十合平さん(20)に、オーストラリア人のビジネスマンがその声をかけて名刺を差し出した。名刺が手元になかった十合さんはあわてたが、頭を下げて震える手で受け取った。周りに迷惑をかける、ということまで頭がいっぱいだった」と振り返る。

1年生だった昨年度、通信機器や無線機器の検査・測定などを手がける「ディーエスピーリサーチ」(神戸市中央

区)の中西伸浩社長(58)に2日間随行し、取引先との商談に同席させてもらった際の体験だ。同社の主な顧客は国内外の大手メーカー。この日のやりとりも英語で進み、専門用語が飛び交った。

参考になるのは商談だけではない。

会議室でのことだ。コップを回収して部屋の外に出ようとした社員の両手がふさがっていることに気づいた社長からドアを開けてあげるよう声をかけられた。一番近くに座っていたが気づけなかったと

いう十合さんは慌てて腰を上げた。「議論に集中しつつ、周囲の動きもしっかり見ている。トップには様々な力が必要なんだと感じました」

商社を希望しているが、父親が営む貿易会社を継ぐことも考えている。「経営者の役割を考える上で刺激的な体験でした。進路選びに生かしたい」と話す。中西社長も「若い人が新鮮な感性で社内の様子や仕事への感想を述べてくれることは、我々にもメリットがある」と話している。

十合さんが学ぶ学部は昨年春、西宮市のキャンパスに新設されたばかりで、起業家の人材育成を目指す。今回のインターンシップも大学側が仲を取り持った。佐藤治正学部長は「実体験に勝る学習はない。企業トップと行動をとるにもすることで、社内各部門の動きも手に取るようになる」と効用を説く。